

馬琴の白話学習と応用：『新編水滸画伝』前後の読 本作品を通して

孫，琳淨
九州大学大学院人文科学研究院：プロジェクト教員（講師）

<https://doi.org/10.15017/7337164>

出版情報：中国文学論集. 53, pp.111-133, 2024-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



馬琴の白話学習と応用

——『新編水滸画伝』前後の読本作品を通して——

孫 琳 浄

はじめに

天保九（一八三八）年刊『八犬伝』第九輯下帙中巻第十九「簡端贅言」において、馬琴は自分の読本文体について次のように語る。

始は只通俗を旨として、綴るに敢奇字を以せず。この故に行毎に、仮名多くして、真名寡し。六七輯に至りては、拙文、唐山なる俗語さへ抄し載て、且意訓をもて、彼義を知しむ。要なき所為に似たれども、世に独学孤陋にて、唐山の稗史小説を讀まく欲する諸生あらば、其が筌蹄になれかしと思ふ、作者の老婆親切なりけり。こゝをもて行毎に、真名多くなりて、字の数さへ、覺ず始に弥増たり。……畢竟文字なき婦幼の、弄びにすなる技にしあれば、故りて風流たる草子物語は、取て吾師に做すべくもあらず。又彼唐山なる稗官小説の、大筆にして奇絶なるも、その文は模擬に要なし。然ばとて坊間に、写本にて行はるゝ、軍記復讐録の類なるは、俗の看官もすさめざるべく、余も素より綴まく欲せず。この故に吾文は、枉て雅ならず俗ならず、又和にもあらず、漢にもあらぬ、駁雜杜撰の筆をもて、漫に綴り創しより、世人謬りて遐け棄す。

『八犬伝』のはじめはもっぱら通俗的な表現を意識していたが、六・七輯からは「唐山なる俗語」、すなわち白話馬琴の白話学習と応用

語彙を多用するようになった。こうして生まれたのが、「雅ならず俗ならず、又和にもあらず、漢にもあらぬ」という雅俗折衷の和漢混淆文であった。

しかし、馬琴がこの雅俗折衷文体に落ち着くようになったのは、決して一朝一夕のことではない。彼は早くも文化元（一八〇四）年刊『石言遺響』の巻末で、「文辞のいやしきを嫌ざるは、通俗を旨とすればにや」と述べ、読本は通俗的な言語で表現すべきであることを主張している。そして、同二年刊『新編水滸画伝』（『水滸伝』の翻訳物。以下『画伝』と略称）の初編前帙の冒頭にある「訳水滸辯」では、その理由と白話語彙を翻訳する際の注意点について見解を示している⁽³⁾。

水滸の一書は。曩に冠山岡嶋老人翻訳の功なりしより以降。我俗始めて世に此の奇編ある事をする。……しかれども婦女童蒙なほ解がたしとするものは。その書。漢文の口調に做ひ。片仮名をもて記せばなるべし。……今予が訳ところは。いよく雅に遠しといへども。別に華本を編訳して。絶て冠山老人の筆に根ことなく。只顧婦女童蒙の為に解しやすきを宗とす。……唐山の俗語を訳するに。我俚語俗言をもてせざれば平等せず。又和名のなき物あり。又和訓の施しがたきものあり。その訳すべきものは。本文の熟字を抄出し。其訳すべからざるものは。我私の筆に操る。この故に一編の文章。古雅と今俗と混雜して更に格体を定めず。

筆者はこれまで、『画伝』の使用語彙を対象とし、日本近世文学における白話語彙の識別基準を確定した上で、『画伝』の執筆順に沿って、馬琴の白話語彙理解の実態を考察してきた。その結果、執筆初期の馬琴は意識を中心に翻訳作業を進めていたが、途中から『画伝』の底本（和刻本『忠義水滸伝』）の書き入れを通して白話の知識を学習し、完璧に理解したわけではないものの積極的に翻訳に生かすようになったことを明らかにした。しかし、彼はこの学習態度を最後まで維持することはできなかった。翻訳の終盤になると、馬琴は原文の語彙を随意に分解するとともに、前後の文脈に適した和語を訓に当て、その語彙に本来存在しない意味を担わせようとしている傾向が見られる（例えば「援将」「過來り」「靠了」など）。

では、文脈に合わせて創出されたこれらの新しい語彙や、新しい意味が付加された語彙は『画伝』以後の読本作品にも使用されているのだろうか。また、馬琴のこの翻訳態度、すなわち中国小説を底本として利用しつつ白話語彙を学習し、あるレベルに達したところで底本から離れて独自の創作を行うという行為は、『画伝』以後の創作活動にも通じるものなのだろうか。本稿では、『画伝』およびその前後の読本作品に見られる白話語彙の利用を考察することで、『画伝』を執筆したことが、馬琴のそれ以降の創作に具体的にどのような影響を与えたのかを浮き彫りにしたい。

一、調査対象の確認

具体的な考察に入る前に、まず本稿における白話語彙の識別基準（特に日本近世文学の場合）と、調査の対象について確認する。

白話語彙とは、一般的に白話文特有の語彙を指す。中国文学における白話語彙の研究では、基本的に唐以降の文献を対象とするものの、唐以前六朝期の漢訳仏典や、小説類（志人小説）、樂府詩の一部にも口頭語に由来する語彙が含まれていることを踏まえれば、これらの文献も視野に入れる必要がある。一方で、日本近世文学における白話語彙の研究においては、白話文学作品を出典とする語彙を主に検討すべきであるが、四大奇書や三言二拍で頻用される、唐代史料や伝奇小説・敦煌變文、さらには宋代史料や散文・宋詞などに由来し、日本では江戸以降の文献にしか見られない語彙も、白話語彙として検討対象に含める必要があると考えられる。以下、白話語彙について検討する場合はすべてこの基準に従う。

次に、今回の調査対象とする著作について簡単に記す。⁽⁸⁾

①『高尾船字文』（五卷五冊、寛政八〔一七九六〕年）

馬琴の読本処女作である。原拠として『水滸伝』『焚椒録』『今古奇観』『搜神記』などの中国小説が挙げられるが、その執筆は『水滸伝』の流行に乗ったものであり、利用の仕方はやや安易であると言われる。

- ②『小説比翼文』（二卷二冊、文化元（一八〇四）年）
『今古奇観』に収録されている「喬太守乱点鴛鴦譜」を粉本とするが、安直な利用法にとどまったとされる。
- ③『曲亭伝奇花釵児』（二卷二冊、文化元（一八〇四）年）
『筇翁伝奇十種曲』中の『玉搔頭伝奇』の翻案ものである。中国の戯曲の形式を全面的に導入したと言われる。
- ④『復讐月氷奇縁』（五卷五冊、文化二（一八〇五）年）
原拠として『水滸伝』『鳳凰池』『今古奇観』『剪燈新話』の利用が指摘され、白話小説の構想によった最初のものであるとされる。
- ⑤『復讐奇談稚枝鳩』（五卷五冊、文化二（一八〇五）年）
『石點頭』第十一卷「江都市孝婦屠身」、第十二卷「侯官県烈女殲仇」のストーリーがそのまま使用されたと言われている。その他、『水滸伝』『棠蔭比事』『警世通言』『拍案驚奇』の利用も見受けられる。
- ⑥『石言遺響』（五卷五冊、文化二（一八〇五）年）
原拠として『剪燈新話』の利用が指摘される。
- ⑦『四天王剿盜異録』（十卷十冊、文化二（一八〇五）年）
後編卷六は『杜騙新書』巻一「遇里長反脫茶壺」を用い、その他、『水滸伝』『搜神記』『五雜俎』『古今説海』の利用も指摘される。
- ⑧『新編水滸画伝』初編（十卷十一冊、文化二（一八〇五）年）
一般読者向けの『水滸伝』翻訳物である。馬琴はこの執筆活動を通して、ある程度の白話の知識を独学したと考えられる。^⑨
- ⑨『椿説弓張月』（二十八卷二十九冊、文化四（一八〇七）年）
馬琴自身が『三大奇書』の一つであると誇っている。後半の琉球争乱においては『水滸後伝』の影響が大きいと指摘されているが、その他、『狄青演義』『水滸伝』『三国志演義』『五雜俎』の利用も見受けられる。
- ⑩『三七全伝南柯夢』（六卷七冊、文化五（一八〇八）年）

「三大奇書」の一つと馬琴自らが誇っている。『搜神記』『南柯記』『三国志演義』の利用が指摘される。

⑪『夢想兵衛胡蝶物語』（五巻五冊、文化七（二八一〇）年）
莊子の胡蝶の夢に基づいて作られたものだと言われている。中国の典故は随所に散見され、発刊当時「大く行はる」と馬琴自らが語っている¹⁾。

⑫『青砥藤綱摸稜案』（十巻十冊、文化九（二八一二）年）
馬琴の名裁判物語である。原拠として『棠陰比事』『龍図公案』『拍案驚奇』『濟顛大師醉菩提全伝』が挙げられる。

二、各読本作品における白話語彙の利用

前述の白話語彙の識別基準に基づき、十二篇の読本作品から白話語彙を抽出し整理したものが、本稿末尾の【表一】である。同じ語彙が複数作品で使用された場合は太字で示し、使用回数をその後に付記した。ただし、同一作品内で複数回現れる場合は一回として計算する。灰色の網掛け部分は、『画伝』の影響を受けたと思われる語彙を示している。

【表一】を確認すると、太字で示されている複数作品で繰り返し使用される語彙が、細字で示されている一作品のみで使用される語彙よりも、はるかに多いことがわかる（『画伝』を除く）。これは、馬琴が一度習得した語彙を積極的に使用する傾向にあることを示唆していると考えられる。

また、十二篇の読本作品に見られる漢語語彙（漢字で書かれ

馬琴の白話学習と応用

【表二】各読本作品における白話語彙の割合表

- ・ 該表は各読本作品における漢語語彙のうち、白話語彙の割合を示したものである。
- ・ 漢語語彙は人名・地名などの固有名詞を除き、一般語彙を対象とする。
- ・ 同一作品内の重複語彙は含まない。

著作名	漢語語彙	白話語彙	割合
①高尾船字文	573	30	5.24%
②小説比翼文	449	41	9.13%
③曲亭伝奇花釵児	379	37	9.76%
④復讐月水奇縁	1236	122	9.87%
⑤復讐奇談稚枝嶋	960	73	7.60%
⑥石言遺響	1052	81	7.70%
⑦四天王剿盜異録	1358	104	7.66%
⑧新編水滸画伝	3268	890	27.23%
⑨椿説弓張月	2959	254	8.58%
⑩三七全伝南柯夢	1236	120	9.71%
⑪夢想兵衛胡蝶物語	1852	125	6.75%
⑫青砥藤綱摸稜案	1594	170	10.66%

た語彙。人名・地名などの固有名詞を除く)、白話語彙を具体的に数字で示せば、【表二】の通りとなる。①『高尾船字文』と⑧『画伝』を除くと、ほかの作品における白話語彙の利用率には大差がないことが判断できる。『高尾船字文』は前述の通り、馬琴の読本処女作である。原拠として『水滸伝』『焚椒録』『今古奇観』『搜神記』などの中国小説が利用されているが、服部仁氏が論じるように、該書は馬琴が意識的に『水滸伝』を応用して創作したものではなく、『水滸伝』の流行に乗ったものである。そのために、白話語彙数がほかの作品よりも少なくなつたものと想像される。一方『画伝』の場合は、これは『水滸伝』の翻訳物であるゆえ、白話語彙数が多くなつたことが推測される。

さらに【表一】の白話語彙を使用回数順に再整理すると、【表三】のようになる(五回以上のみ)。利用頻度の高いものは、名詞(縁故／縁故〔十回〕、臥房〔九回〕、刀尖〔八回〕、壮俊／壮俊〔七回〕)、動詞(焦燥〔九回〕、準備〔九回〕、款待〔七回〕)、形容詞(慌忙〔十回〕、老實／老實〔六回〕)、副詞(只管〔九回〕、只顧〔九回〕、撲地〔八回〕、驀直〔六回〕)、接尾辞(們〔七回〕、子〔四十二回〕)などの語彙に加えて、裡／裡〔九回〕、個〔八回〕などの文字表記も含まれ、多岐にわたることががわかれる(語彙の品詞は前後の文脈に鑑みて判断したもの)。

その一方で、語彙の後に付した丸数字(当該語彙の初出を示しており、【表一】の作品名に対応する)を一見すれば明らかのように、これらの語彙の多くは、文化元(一八〇四)年刊②『小説比翼文』以降の読本作品から現れたものであることを強調しておきたい。これは、馬琴が白話語彙や文字表記に関心を持つようになったのが文化元年

【表三】白話語彙の使用回数表(五回以上)

- ・丸数字は【表一】の作品名に対応し、当該語彙の初出を示している。
- ・太字は馬琴の読本作品が初出となる語彙を示している。

回数	10回	9回	8回	7回	6回	5回
白話語彙	縁故②	只管②	花街①	小廝①	老實②	大勢①
	慌忙③	臥房②	記念/記念①	V+着/著①	茶店②	主管①
		只顧②	刀尖②	裡面②	遮莫②	路銀①
		焦燥③	一五一十②	打扮③	樓/樓上②	究竟③
		準備④	数詞+個②	壮俊④	朴刀③	喊声④
		外面④	活業②	人称代名詞+們④	貯禄④	暗號④
		小廝①	撲地④	浩処⑤	起程/裡④	家廟⑤
				好意⑤	面色④	奮然⑤
				縁由⑤	V+了④	駭然⑤
				款待⑦	只見④	説示⑤
				路費④	驀直⑤	住居⑥
					通/遞與⑥	胡慮⑦
					常言⑦	勸解⑧

以降であることを端的に示しており、彼が初めて読本の文体について言及した時期とも一致する（前掲『石言遺響』卷末の言辭⁽¹⁵⁾）。

ところで、馬琴が頻用するこれらの白話語彙は、彼以前の近世文献や文学作品に見られるのだろうか。国会図書館デジタルコレクションやジャパンナレッジ（『日本古典文学全集』など）を通じて、【表三】に示されている五十二語を調査した結果、馬琴の読本作品を初出とする語彙は十九語にのぼる（【表三】の太字で示した語）。そのうち、「準備」「縁由」「勸解」などの語彙は、読み方にこそ異同があるものの、現代の日本語にも姿が認められる。これは馬琴の読本が現代日本語の漢語語彙の形成に多大な影響を及ぼしていることを如実に示している。

三、『画伝』の執筆が馬琴の読本創作に与えた影響

『画伝』にはおよそ八百九十個の白話語彙が使われているが、『画伝』以降の四作品に見られる関連する白話語彙は五十三語にとどまる（【表一】の灰色の網掛け部分）。調査対象を広げれば、多少なりとも増加するかもしれないが、これは今後の課題としたい。

この五十三語の中には、それぞれの読本の原拠から直接借用した語彙も含まれているが、明らかに『画伝』の影響を受けて使用されているものも見受けられる。以下に用例を引きつつ、具体的に考察してみる。

まずはそのまま再利用される語彙である。用例文中の囲み線は筆者が施したものである。

(1) 桿棒^{よりぼう}

【⑧画伝】（楔子）この故に一條の桿棒^{よりぼう}をもつて。四百餘州^{よしゅう}を打成^{うちなりけ}。世界を掃清^{はききよめ}て宇宙^{あめがした}を蕩靜^{ゆりしづめ}。

【⑨弓張月】（第七回）野加世馬^{のかぜうま}を駭^{おどろか}して桿棒^{よりぼう}を嚼^かむ⁽¹⁶⁾。

【⑪夢想兵衛】（卷之五）車井戸^{くるいど}の轆^{おき}る音。昼の撃析^{げきしき}に飯^いときをしらせ。夜の桿棒^{よりぼう}は。枕元^{まくらもと}にかざらせ⁽¹⁷⁾。

【⑫摸稜案】（後集卷之五）或は床机^{せうぎ}に尻^{しつ}をかけ。或は桿棒^{よりぼう}をもて威^いを示し⁽¹⁸⁾。

(2) 口順^{くちずみ}

【⑧画伝】(卷之二) 又よく毬を踢て、雙なき高手なり。こゝをもて都の人彼を「口順」高二とは呼ばずして高毬と呼びつ。

【⑨弓張月】(第二回) こゝをもて人「口順」に渾名して八町礪紀平治太夫と呼びて候。

【⑩三七全伝】(卷之二) 三勝が舞の手に、都鄙の人を招きよしてその名高く聞え、牛打童も「口順」て。これを見ざらんものは、人も蔑り我も耻かはしく思ひけるとぞ。

(3) 倍話／陪話／賠話

【⑧画伝】(卷之四) 何事も僕が面皮に看て許し給へと倍話ければ。

【⑨弓張月】(第五回) 嚮に管待の厚からさりしを陪話たりける。

【⑪夢想兵衛】(卷之三) 彼既に金に心あり。争賠話をきくべき。

【⑫摸稜案】(卷之三) さて立ながら疎遠を賠話候に。兄も忽地にうちとけて。

(1) 「桿棒」と(2) 「口順」については、【⑨弓張月】などにおける表記も送り仮名も【⑧画伝】と完全に一致している。一方、(3)の「倍話／陪話／賠話」については文字表記にこそ差異が見られるものの、送り仮名は基本的に【⑧画伝】と一致している。なお、「倍話／陪話／賠話」に関しては、中国の白話小説においても表記が一定していない。たとえば、文繁本『水滸伝』の諸版本では基本的に「陪話」と表記されるが、建陽系の『水滸志伝評林』や『英雄譜』などの文簡本では「倍話」と作られる。また「賠話」の用例は『醒世姻縁伝』に見られる。この(1)(2)(3)の語彙が『水滸伝』特有の語彙であるとは断言できないが、高い頻度で『水滸伝』に利用されていることは事実である。従つて、馬琴は『画伝』の執筆作業を通して、『水滸伝』からこれらの白話語彙を学習し、『画伝』以降の創作活動に生かしたと推測される。

次に、読みに変化が見られる語彙である。

(4) 土兵／土兵↓土兵

【⑧画伝】(卷之四) さても史進は。華陰の縣尉が。二人の都頭とゝもに。許多の土兵を率て。莊院の四面をとり

圍しを見て。(＊左訓…トチノツハモノ)

(卷之四) 縣尉は活たる心持もなく。鞭を鳴らし馬を跑し。土兵もろ共に。たつ足もなく逃うせぬ。

(＊左訓…ヒヤクセウ)

【⑨弓張月】(第十一回) 家隸郎等はさら也、俄頃(にはか)に三百人の士兵(どへい)を催し集め、武藤太(ぶとうだ)を案内(しるべ)として、石山の浴室を、
稻麻竹葦(とうまけ)にとり圍せ……

(5) 配軍(るにん) ↓ 配軍(さすむひんと)

【⑧画伝】(巻之十) すべての配軍(にん)常(つね)に來りて、倚草附木(すにつけさけにつけ)みなわれは鎗棒(やりぼう)の教頭(きやうとう)なりとて。

【⑨弓張月】(第十四回) 鯨江(さくらえ)糧(りやう)を饋(く)りて配軍(にん)を憐(あはれむ)。

(4) 「士兵」について、【⑧画伝】では「ひやくせう」または「とちのつはもの」と読ませているが、【⑨弓張月】では「どへい」と読む⁽²⁰⁾。実際に馬琴が「士兵」を「どへい」と読むのは【⑨弓張月】が最初ではない。彼は早くも『画伝』冒頭の「職役称呼俗解」の中で、「士兵」を「どへい」と訓じて、「軍役にかりもよほされたる百姓なり」と解釈している。それにもかかわらず、『画伝』の本文の中で音読みではなく訓読みを選択したのは、馬琴が『画伝』の創作時に常に読者である「婦女童蒙」を意識し、耳で聞いても理解できるように執筆活動を行っていたからであろう⁽²¹⁾。

一方、『画伝』では音読みされていた語彙が、『画伝』以降の読本作品では訓読されるようになった例も認められる。用例の(5)「配軍」である。

『弓張月』の文体について横山邦治氏は、『椿説弓張月』前編では相当色濃くそうした傾向(筆者注…五七調を主調とする特徴的和漢混淆文による叙述)がうかがえる⁽²²⁾と述べ、これを受けた野口隆氏は、詳細な考察を行うことで、『椿説弓張月』の七五調は後半にかけて徐々に増えていることを明らかにした⁽²³⁾。つまり、【⑨弓張月】で「配軍」を「さすらひひと」と訓読したのは七五調を意識した所為ではないかと考えられる。実際に、用例(5)はまさに『弓張月』の回目位置しており、よりリズムが重視されたと推測される。

そして、新たな意味が付加された語彙の検討である。

(6) 勧解(あつかん) ↓ 勧解(あひ)

【⑧画伝】(巻之四) すべて圍住(たちこめ)てこれを見るといへども、魯達(ろたつ)が猛威(いきほひ)に懼怕(おちおそ)れて。勧解(あつかん)とするものもなく。

【⑨弓張月】(第十九回) 遂に伊豆の国府に参りて先非を勸解、年の貢は舊に倍して献るべきよしを申すにぞ。

【⑩三七全伝】(卷之四) 町寧に勸解しかば、頭陀平点頭て。そはいはるゝまでもなし。

【⑪夢想兵衛】(卷之二) 切戸を開きて走り入り。堪忍してたべわが妻。と勸解てそれから夜あそびせず。

【⑫摸稜案】(卷之三) 兄茂曾七に撞見て、去年よりの疎遠を勸解るに。思ひの外に茂曾七がこゝろとけて。

「勸解」は本来、争っている両者の間に立ち調停する意であり、【⑧画伝】での意味も原義の通りである。しかし所引の用例からも明らかのように、【⑨弓張月】以降では「勸解」が「わび」と訓読され、自分の言動を反省し、謝罪する意味で用いられるようになった。はつきり言えば、これは馬琴の誤用である。「勸解」を「わび」の意味で使う例は、馬琴の読本以外には、栗杖亭鬼卯『復讐奇談初瀬物語』(文化十(一八一三)年序)に二例しか確認できず、馬琴の影響であろうことは想像に難くない。

ともあれ、このように中国の白話語彙に新しい意味を付加する行為は『画伝』でしばしば見られる(注(5)で示した拙論に詳しい)。「勸解」を「わび」と訓読するのも、また馬琴独自の使用法であり、彼の慣用語と言える。

最後は誤りがそのまま継承された語彙の用例である。

(7) 稍盡頭↓稍盡処↓盡処

【⑨弓張月】(第四十一回) こゝろ安勢里の村稍盡処、何地へ伊計の郷うち過て……

(第四十二回) しかはあれ、久志も羽地も山北省の稍盡処にて、道いと遠しと聞くに……

【⑩三七全伝】(卷之五) 半七が宿かりし沓掛の客店は。驛稍盡処にて。いと大きな家なれど。

【⑫摸稜案】(卷之二) こゝろ頻に慌忙郷稍盡処を望て走るとて。涸井に滾落ける時。贓物をみな遺し。

(卷之三) 池子の村稍盡処に。字平といふ壮俊ありけり。

(後集卷之一) せんすべなさに驛稍盡処へ立出て行人の袖を引つゝいひこしらへ。

(後集卷之二) 縁故は簡様々と。寤寐の里尽処ある松蔭にて。兩個の悪徒に劫かされし折。

(後集卷之三) しかるに嚮に驛盡処より。おん身を誘引立かへり。

【水滸伝】(第四回) 智深尋思一計。若不生個道理、如何能勾酒吃。遠遠地、杏花深處、市稍盡頭、一家挑出個草帚

兒來（智深は一計を案じました。手立てを考えないと、どうしたって酒を飲めるはずがない。遙か彼方、杏の花が深く繁るあたり、市のはずれのどん詰まりに、一軒草を束ねた酒屋のしるしを突き出しています）。

【⑧画伝】（巻之六）その時魯智深はこゝろの中に謀を設ける門に。草箒児を挑出せし家あれば。市稍盡頭にゆきて見れば。杏花ふかく咲乱れたる門に。

【⑨弓張月】【⑩三七全伝】【⑫摸稜案】の「市稍盡処」に関する用例は、馬琴読本以外には見られず、唯一『水滸伝』第四回到「市稍盡頭」という語が見えるのみである。小松謙氏の語釈（注（24）参照）によれば、「市稍」は「市」とも表記し、元来枝の先、転じて端を意味する。市、つまり市の立つ町の端。「盡頭」はどん詰まりである。従って、【⑧画伝】において「市稍（市のはずれ）」「盡頭（どん詰まり）」の四文字を合わせて「まちはづれ」と訓読することは誤訳の範疇には含まれない（【⑨弓張月】第四十一回の「村稍盡処」、【⑩三七全伝】の「驛稍盡処」、および【⑫摸稜案】巻之二の「郷稍盡処」なども同様）が、しかし、【⑨弓張月】第四十二回の「市稍盡処」を三文字で一語とし、「はづれ」と訓じるのは明らかに誤りである。裏を返せば、馬琴は【⑧画伝】の時点ですでに「市稍盡頭」を一語として誤認していたことがうかがえる。この誤認は【⑫摸稜案】まで引き継がれ、最終的には【⑫摸稜案】の後集において「尽処／盡処」によって修正されたと考えられる。

なお、「市稍盡頭」を「市稍盡処」と書くのは、馬琴の単なる記憶違いなのか、それとも意図的に「頭」を「処」に改めたのかは不明であるが、「画伝」以降の馬琴読本（今回の調査対象外の作品も含む）では、基本的に「はづれ」を「市稍盡処」あるいは「盡処」と表記している（「盡頭」は『近世説美少年録』に二例が見られるのみ）。「市稍盡処／盡処」は『画伝』から継承された馬琴独自の用語であろう。

（8）一道烟走→一烟走

【⑨弓張月】（第九回）ゆく路のいと暗きに、武者十騎あまり、蕉火をふり照しつゝ、一烟走に追蒐たり。

【⑧画伝】（巻之四）小二おそろく再び口を開かんとする時、魯達拳を揚げてその面上を打ちしかば、板齒二枚を打ち折りけり。小二はこれに驚き怕れ、顚を抱へつゝ走り躲れて……鄭屠も今は忍び得ず、怒

【卷之五】
 魯智深忽地^{たちまち}に起き出で、忙^{いそ}がはしく直綴^{ちてつ}を引き被^かけ、一道烟走^{いちだんしゆく}に僧堂^{しやうだう}を走り去るにぞ。

【水滸伝】（第三回）
 那店小二口中吐血、再復一拳、打下當門兩箇牙齒、小二爬將起來、一道烟走向店裏去躲了……

鄭屠大怒、兩條忿氣從脚底下直衝到頂門。心頭那一把無明業火焰騰騰的按納不住、從肉案上搶了一把剔骨尖刀、托地跳將下來（番頭が打たれて口から血を吐くところを、更に拳で一発、前歯を二本たたき落とせば、番頭は這い起きると、雲を霞と店内に逃げて隠れていきます……鄭屠は激怒して、二筋の怒りは足の裏から脳天までまっしぐらに衝き上げ、心の内なる無明の業火はめらめらと押さえることもできぬまま、まな板の上から骨をえぐり出す包丁をひったくると、トンと飛び出してまいります）。

（第四回）
 待他起來、穿了直綴、赤着脚、一道烟走出僧堂來（起きてから、直綴を着ると、裸足のままで雲を霞と僧堂から駆け出します）。

【⑨弓張月】に見られる「一烟走」という表現も、馬琴の読本以外では確認されていない。この表現は明らかに【⑧画伝】の「一道烟走」に由来するものと推察される（【⑧画伝】には二つの用例があるが、一つ目の用例に対応する『水滸伝』の本文には「二道烟走」という表現は存在せず〔傍線部は両作品の対応箇所〕、馬琴は前文「一道烟走向店裏去躲了」から「一道烟走」を学習して、ここで用いたと推測される）。

本来、「一道烟」は一語であり、走る速さを修飾しており、「一道烟走」は「一筋の煙のように速く逃げる」の意味である。しかし、馬琴は【⑧画伝】において、「一道烟走」を一語として誤解し、「まっしぐら」と訓読した上で、逃げる場面以外にも誤って流用している。この誤用は【⑨弓張月】にも引き継がれ、「二烟走」という形になり、馬琴独自の用語として定着したと考えられる。

おわりに

以上『画伝』およびその前後の読本作品(全十二篇)に見られる白話語彙の整理分析を通じて、文化期における馬琴の白話語彙の学習および応用の実態を考察してきた。『画伝』前後の読本における白話語彙の利用率や品詞には大きな差異が見られず、馬琴は一度習得した語彙を積極的に活用する傾向があることが明らかとなった。また、『画伝』で創出された新しい語彙や、新しい意味が付加された語彙も、わずかではあるが『画伝』以降の読本に見出すことができた。これらの語彙の中には、後に正しい方向へ修正されるものもあれば、そのまま定着し、馬琴独自の用語として残るものも存在する。

なお、特筆すべきは、第三節で用例として取り上げた八つの語彙がほぼ『画伝』初編の前半部分に集中することと、(4)の「土兵」と(5)の「配軍」が『画伝』冒頭の「職役称呼俗解」において注釈されていることである。また、繰り返し述べたように、『画伝』執筆の終盤になると、馬琴は原文の語彙を随意に分解し、前後の文脈に適した和語を訓に当て、その語彙に本来存在しない意味を付与しようとしていた。これらのことから、馬琴が「まじめ」に『水滸伝』の白話語彙を学習したのは、『画伝』前半の執筆においてのみであると判断される。つまり、馬琴が中国小説を底本として利用する際、初めは積極的に学習しているため、その記憶も比較的に鮮明であるが、慣れたところで、或いは一定レベルに達したと認識したところで、彼は底本から離れ、独自の創作を行うようになったのである。

馬琴のこの学習態度、ひいては中国小説に対する姿勢は、決して語彙のみに現れた現象ではないと考えられる。実際、天保三(一八三二)年四月二十八日友人殿村篠齋宛の書翰において、馬琴は

寛政の末から文化中は、追々俗語小説ものかひ入、五六十部にも及び候処、……文化の末より見識かはり、小説ものはうつとうしく覚候間、追々有用の他本と交易いたし、只今は三ヶひとつも無之、只端本など、少し残し置候のみ、をしき事をいたし候也。……近來は又元の麓へ立もどり、俗語小説も有益不少事御座候間、又ほしく成り、少々ツゝかひ入候半と存候へば、高直に付、手のとゞかぬもの、多く御座候。²⁶⁾

と、寛政の末から文化中にかけて俗語小説を大いに利用したが、文化の末からその熱がさめたことを述べている。では、馬琴の白話小説離れは具体的にいつ頃から始まり、どのように変遷しているのか。今後はこの課題を念頭に置きつつ、彼のその他の読本に見られる白話語彙の受容を考察し、馬琴生涯の白話学習の全体像を提示したいと思う。

注

- (1) 曲亭馬琴作、小池藤五郎校訂『南総里見八犬伝(七)』(岩波文庫 一九九〇年七月第一刷) 一九九五年六月第三刷 二一七頁に拠る(以下同様)。引用に際して、送り仮名は適宜省略した。
- (2) 浜田啓介氏は『新編水滸画伝』初編前帙の刊行年について、「前帙見返しに「丙寅發兌」とあるから、遅れて、翌(文化)三年になったようだ」と述べる(「近世小説の水滸伝受容私見——『新編水滸画伝』と馬琴の金聖歎批判」〔『近世小説・営為と様式に関する私見』所収 京都大学学術出版社 一九九三年二月〕二四八頁に拠る)。以下『画伝』の引用は国文学研究資料館蔵本(国書データベース <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/20001541/>)に依拠する。
- (3) このほかに、文化四(一八〇七)年刊の『標注園の雪』にも、数ヶ条の構成に関するもの以外は悉く語彙の注釈で占められている(中村幸彦『滝沢馬琴の小説観』〔『中村幸彦著述集』第一巻所収 中央公論社 一九八二年二月〕三〇三頁に拠る)。ただし、白話語彙と言える語は多くない。
- (4) 拙稿「日本近世文学における白話語彙の識別基準に関する考察——『新編水滸画伝』の使用語彙を例に——」(『中国文学論集』第五十二号 九州大学中国文学会 二〇二三年二月)。
- (5) 拙稿『「新編水滸画伝」の執筆から見た曲亭馬琴の白話学習』(『文学研究』第一二二輯 九州大学人文科学研究院 二〇二四年三月)。
- (6) 馬琴が『画伝』の底本として使用した和刻本『忠義水滸伝』は、現在、昭和女子大学図書館桜山文庫に現存している(<https://www.ro-da.jp/swu/contents/3089>)。この和刻本の行間や欄外随所に大量の書き入れが認められる。これらの

書き入れは馬琴に先立つ所蔵者が『忠義水滸伝解』や『俗語解』などの唐話辞書、『言鯖』などの漢籍から抄記したもので、馬琴はこれらの書き入れを参照しながら『画伝』を執筆した可能性が高い（拙稿「馬琴手沢本『忠義水滸伝』の語釈書き入れについて」〔拙著『日本近世における白話小説の受容 曲亭馬琴と『水滸伝』』所収 汲古書院 二〇一一年四月〕にて詳しく論じている）。

（7） 白話語彙の識別基準については、注（4）前掲拙稿でも詳しく論じたが、宋代史料や詩詞、散文を初出とすると思われる語彙についての検討が不十分であったため、ここで少し補足する。

まずは、馬琴読本に見られる宋詩を初出とする語彙「伶俐」「描寫」である。「伶俐」は聡明の意味として、宋・朱淑真「自責」詩之二「添得情懷轉蕭索、始知伶俐不如癡」を初出とするが、室町中期頃に成立した「古本節用集」に広く見られる。また、宋・梅堯臣「和楊直講夾竹花圖」詩を初出とする「描寫」という語彙は、『義経記』（南北朝時代から室町時代初期に成立したとされる）を始め、江戸以前の文学作品に散見される。次に、宋詞を初出とする語彙「花街」「打扮」である。「花街」は宋・黃庭堅「滿庭芳・妓女」詞を初出とし、『英草紙』など江戸の文学作品に用例が認められる。「打扮」は宋・盧炳「少年遊」詞を初出とし、馬琴の読本作品にしかその用例が確認できない。最後に、宋代の隨筆・語録などの散文と歴史書を初出とすると思われる「秘密」「探索」「喚做」「叫囂」「丁稚」「路銀」「荊婦」「暗號」「住職」などの語彙である。これらの語彙は、いずれも江戸以降の文献にしか存在が認められない。

従って、日本近世文学における白話語彙の研究においては、主に白話文学作品を出典とする語彙をメインとすべきだが、四大奇書や三言二拍で頻用される、唐代史料や伝奇小説・敦煌變文に由来し、江戸以降の文献にのみ存在が確認される語に加えて、宋代史料や散文、宋詞を初出とし、同様に江戸以降の文献にしか存在が認められない語も、白話語彙として検討対象に含める必要があると考えられる。

（8） 調査対象①②の粉本、利用の仕方に関する記述は主に次の諸先行研究を参照した。

・麻生磯次『江戸文学と中国文学』（三省堂 一九四六年五月）

・水野稔「馬琴と拍案驚奇」（『江戸文芸論叢』所収 中央公論社 一九七四年一月）

・徳田武『日本近世小説と中国小説』（青裳堂書店 一九八七年五月）、同『近世近代小説と中国白話文学』（汲古書院

二〇〇四年一〇月)

・水野稔他編『図説日本の古典一九 曲亭馬琴』(集英社 一九八九年五月)

・崔香蘭『馬琴読本と中国古代小説』(溪水社 二〇〇五年一月)

・三宅宏幸『馬琴研究——読本の生成と周縁——』(汲古書院 二〇二二年二月)

(9) 注(5) 前掲拙稿に詳しい。

(10) 「抑吾戲墨物の本の、殊に時好に称ひしは、弓張月及南柯夢胡蝶物語。小冊子は、傾城水滸伝、新編金瓶梅、この他猶あるべし」(『八犬伝』第九輯卷之三十六「簡端附言」に拠る)。

(11) 『近世物之本江戸作者部類』(岩波文庫 二〇一四年六月) 二四〇頁に拠る。

(12) 服部仁「曲亭馬琴、その文体の確立——初期の戯曲性より——」(『曲亭馬琴の文学域』所収 若草書房 一九九七年一月) 一八四頁を参照。

(13) 「裏」の異体字「裡」は元末の『太平楽府』や成化期の『朱子語類』でもいくつかの用例が見られるが、普及は嘉靖以降と見るべき。一方、「裡」の出現は「裡」より遅く、萬曆以降とすべきであるという(佐藤晴彦「三遂平妖伝」は何時出版されたか?——文字表記からのアプローチ」(『神戸外大論叢』第五十三巻第一号 神戸市外国語大学研究会 二〇〇二年九月)。

(14) 「個」は宋代の類書『廣韻』『類篇』『集韻』などに記述はあるが、実際の用例が見られない。おそらく明初に現れ、使われ出したのは明代の成化年間前後、萬曆年間にはごく普通の表記法として定着したという(佐藤晴彦「元明期の文字表記——〈個〉の出現をめぐる——」(『神戸外大論叢』第五十一巻第六号 神戸市外国語大学研究会 二〇〇〇年一月)。

(15) 注(3) 中村氏論考二八七頁を参照。

(16) 国文学研究資料館蔵本(国書データベース <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100400302/1?ln=ja>)を参照した(以下同様)。

(17) 早稲田大学図書館蔵本 (https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/he13/he13_03096/) に拠った(以下同様)。

(18) 早稲田大学図書館蔵本 (https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/he13/he13_03145/) に依拠した(以下同様)。

- (19) 早稲田大学図書館蔵本 (https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/i04/i04_00600/i04_00600_0212/) に拠った(以下同様)。
- (20) 後藤丹治氏によれば、『八犬伝』や『開卷驚奇俠客伝』にも所々に「土兵」を「ところのつはもの」と読む箇所があり、『俠客伝』第三十三回の頭注では「土兵(どへい)はその地の民を駆集めて軍役に使ふをいふ。よりてトコロノツワモノと訓(ヨマ)したり」と馬琴自身が解釈している(後藤丹治校注『椿説弓張月』上巻『日本古典文学大系』六十岩波文庫 一九五八年八月)一七六頁に拠る)。
- (21) 今予が訳ところは……只顧婦女童蒙の爲に解しやすきを宗とす……その傍訓のごときに至ては。音訓に管らざるものあり。譬は詔書を読んで勅書とし、僧人を読んで法師とし。……禪杖を読んで鹿杖とし。……金剛を読んで二王とし。嶽廟……を読んで美嶽神社とし。人氏を読んで住人とし、商議を読んで談合とするの類。枚挙に遑なし。これ傍訓は字の注なり。しかせざれば。耳に聞くものに喩しがたし(『訳水滸辯』に拠る)。
- (22) 横山邦治『読本の研究』第二章第三節その一(風間書店 一九七四年四月)四五三頁を参照。
- (23) 野口隆『椿説弓張月』の七五調(『近世文藝』第七十二号 日本近世文学会 二〇〇〇年七月)を参照。
- (24) 『水滸伝』本文の引用は、注(6)で示した昭和女子大学図書館桜山文庫所蔵の馬琴旧蔵和刻本『忠義水滸伝』に拠った。日本語訳は小松謙『詳注全訳水滸伝』第一巻(汲古書院 二〇二二年八月)を参照、以下同様。
- (25) 今回の調査対象ではないが、馬琴の『墨田川梅柳新書』(六卷六冊、文化四(一八〇七)年)にもう一例「源五が徒「一烟走」に追留んと聞ば、忽地草の根に跳き象棋倒しに轉輾を……」が見える(早稲田大学図書館蔵本 [https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/he13/he13_01300/] に拠る)。従って、「一烟走」は馬琴の誤写ではないと判断する。
- (26) 柴田光彦・神田正行編『馬琴書翰集成』第二巻(八木書店 二〇〇二年十二月)一二四頁を参照されたい。

付記…本研究は、令和六年度科学研究費助成事業・若手研究・課題番号二三K一二〇八四「日本近世文学における中国白話小説の受容——馬琴読本の白話語彙を中心に——」の助成を受けたものである。

【表一】『画伝』前後の読本作品における白話語彙の利用

- ・該表は『画伝』及びその前後の読本作品（全十二篇）から白話語彙を抽出して整理したものである。
- ・同じ語彙が複数作品で使用された場合は太字で示し、使用回数をその後に付記した。
- ・（同一作品内で複数回現れる場合は一回として計算する）
- ・灰色の網掛け部分は、『画伝』の影響を受けたと思われる語彙を示している。

⑤稚枝鳩		④月水奇縁		③花釵兒	②比翼文	①船字文
路銀	辻伎	平族	老實	奇談2	冊子	主意
必用	剣法2	路費7	大轎3	戲文	看官	深更
家廟5	射藝	轎夫4	轎簾2	数詞+個	色情2	住職2
路費	活業	身契	探索3	面色6	幫間3	大勢5
油紙	撲地	我們7	涼衫	賊魁	小姐	他出
七轉八起	哭號	百折千磨4	刀架	素袍	乳娘	鎗/槍棒2
怕害3	門口	分鏡	目標2	著/着	從來3	眷頭
鮮血	焦燥	壁櫥裏	喉問	手段	開場始事	丁稚
舶来	外面	梳具匣	樓上	少刻	花街	旅泊
N+裡/裡9	只顧	恋憐3	奇遇2	賊婢	話說4	呼做
奮然5	跟々踏々4	悶苦	令愛3	焦燥	從良	近年2
紙圪	忙慌2	衝動	喊声5	慌忙	識貨	輕薄
後辺	駭然5	辛苦錢2	眉尖刀	亮隔3	不錯	荊婦4
嫖院	只管	破爛2	裡面	究竟5	裡面7	師弟3
主管	只見	睜開	情由4	外面9	前腔	秘密
打水2	数詞+個	熱腸3	只顧	庖漏3	一向2	臥房9
熱鬧2	劃然	刀尖	辻伎7	甚麼2	慌忙10	冤家
茶店	裡面	喚做2	團坐4	哭声	記念	只顧9
茶法	居多4	陰鬼	貯祿6	臥房	牽頭	茶店6
殃危4	童侍	紙門	猛然4	甦醒4	場所	数詞+個8
茶盒	端座	大哥2	撒潑	謔語2	汗顏	刀尖8
刀尖	頑兒	愚父2	醜穢	荊婦	活業	四分八落2
臥房	說示5	四分八落	路徑	再三再四	朴刀6	仔細
截割	嘆賞	搭/胳膊2	套房2	戒刀2	尾声	一五一十8
托庇	準備	起程/程6	爽利	防身刀	較計4	他事4
傍示	好意7	一五一十	暗號5	準備9	板子	戲言
鳥銃	猛然	鏢鎗	砍殺2	V+了6	工夫	黑夜
手銃	緣由7	皂夾服	背影2	記念	纏致3	活業8
少刻	花街	罩衣	鮮血	幕直6	焦燥9	緣故10
奇遇	賭博2	朴刀	遮莫	潑皮2	門口3	道者
	遮莫	斷離2	汎濶	衆賊	大勢	義氣
	席帽	地炕4	洗塵	眼罩3	血路	假托4
	浩処7	荆妻	悞熱	瀾然	打扮7	邪念
	一椀	奇縁3	活業	交付	腔調	遮莫6
	慌忙	小説4	虔婆2	明晃々4	脚色4	相伴
	昏倒3	解冤	病症2	追赶	趣意	樓/樓上6
	緣故		病疴2	撲地8	書買	備細3
	一塊		盤纏4	肩尖2		路徑3
	行囊4		雜費4	身邊		大勢
	一五一十		丈夫	信耗3		嫖院2
	鎗棒		花街	只見6		凶音
	信耗		身價3	買路錢		
	幕直		轎子4	緣故		

⑧新編水滸画伝					⑦四天王則盜異録			⑥石言遺響	
打扮	一繳	捱	近曾	播乱3	驀直	小厮	考据2	烧火	居多
掩心	捏4	都軍	員外	桿棒4	火器	打敲	害怕4	打水	火筒
数詞+把3	團坐	勢要	花街	黄榜	剪径3	黑癡2	鼯瑟	旁里	画幅
四竅八環	V+著/着	胡說	府尹	端的是	看街	緣由	壯嚴	裏袱	面色
裏金	承當	都牙將	房金	田禾	咄喝	勾引	愚棍4	婚縁	循還
衲襖	花繡2	理會	活業	軍民2	浩処	好意	焦燥	煽々	遮莫
一齊	胸膛	打翻	生藥舖	一天	一五一十	打罵	検巡	壮伎	奮然
放過	師弟	縁由	盤纏	殿頭官	蹲踞3	記念	只顧	不在話下	裡面
一來一往	連累	常言	資發	羅天大醮	明晃々	常言6	拐掣	諺語	数詞+個
頂門	花銀	相公	藥店2	起行	只見	光棍4	偶意	兇勇	外面
心坎	打熬	棒鎗	V+了	一派	路費	壮伎	只管	切害	家廟
心窩	過七	牌軍	破落戸2	只顧	威風凜々	把勢	通与	老實	貯禄
落草	探頭	酬愿	客房	款待	旅路4	轎子	胡慮5	打扮	工夫
解送	認得2	廟祝2	款待	路徑	樓上	匿居	起程	只見	浩處
賞嘆	張望	貯禄	幹人	撲地	探索	話分兩頭	間話休題3	餘義	怕害
一腔	脚頭	打扶	目今4	阿呀2	家廟	肢骸	喊声	勾當2	撲地
士兵2	常時	後槽	小舅	只見	相貌堂々2	不題2	縁故	七類八起	万夫不當
都頭	強盜	拴縛	東道	焦燥	綽名4	盤纏	叫囂	狼心狗行	只管
乾淨	山寨2	押下	準備	簌簌		連打	数詞+個	痴漢	信耗
梯子	小喽囉	宿頭	淨手2	一溜		款待7	奮然	斃人	縁故
頼哩	賞錢	莊院	鎮紙	了髻		排軋	居多	熱鬧場2	駭然
原告	野味	莊客2	手頭	千辛萬苦2		對應	各位2	妓院2	閑話休題
出首	村坊	貴宅	盒子	真貴		起程	準備	典身	大轎
分說	薊惱	莊主	包袱	額外		正廳2	暗號	甦醒	襁褓
蒜條金	用心	太公	把門	醜事		備細	財布3	朴刀	慌忙
零碎錢	廳前2	打麥場	院公	書匣		浪蕩	慌忙	猛然	只顧
錦襖子	莊戸	擔児	庭心裏	遞與		懶墮	妖婆	縁由	鯁忠
銀子	囉啤	遮塵	小黃門	件件		拳止3	駭然	記念	路費
浪蕩々踏々	倘若	煖帽	唐巾	封皮		曉得3	襯手	行囊	外邊
抖	梆子	直縫	一時	鎖鎖		狗黨2	住居	却說3	疎然
上面写	暗号	寬衫	膽量	害怕		拐児	籬笆3	鼯瑟2	肩尖
福蔭	救應	熟皮	鴛鴦拐	火工		大勢	臥房	樓上	舉止
按圧/壓	拴束	消折	書簡	冷氣		妙計4	外面	明晃々	臥房
喊声	性粗鹵	問慰2	玩器	普通		近年	裡面	百折千磨	準備
外面	大捍刀	外罩	再三	衝破		眼罩	昏倒	小厮	轎子
鬧動	刀尖	声喚音	本事3	四面八方		N+裡	撲地	近邨	轎簾
砍殺	我們	病發3	手本	慌忙		究竟	甦醒	焦燥	空擲
朴刀	厮殺	破綻	花帖	口順3		打扮	面色	刀尖	遞/遞與6
懼怕	哥哥	師父	一々點見	驛站		令愛	調度4		賤婦
咄	錢糧	點撥	禁軍	府中		賞嘆3	貯禄		住居5
寨內	胳膊	較量	教頭	浮浪子弟		悠々然	地炕		嫵妍
草賊2	驀地2	鎗架	牌頭	排行		酬愿3	昏絶4		雍染
好情	鑼鼓	旗鼓	躬腰	幫間		封皮4	神機妙算		菜刀

⑧新編水滸画伝

職事僧2	壞損	做家	光腦袋上	禪床上	軍漢	狀子	發付	做公人
軍健們	烏鴉巢	碗燈	刈刈剥剥	早齋	咒語	轎子/者	房宿錢	六街三市
薦將	香積厨(中)	壓棄夫人	盤頭	喊聲	時下	把門軍士	算清	茶坊
種地道人	知客寮	摸來摸去	卓脚	火工老郎	僧鞋	龕函	晚飯	路口
僧門中	四圍	肚皮	一味	喝采	拜具	行衙	店小二	凳子
人員	竈頭	直娘賊	口角	叮々嚕々	整々齊々	緝捕	小二	茶博士
頭項	監齋使者	頸子	赶到	賣店	巾幘	房主人	攔住	客官
清職	厨房	乱打2	做主	麪店	一周遭	撞倒	房錢	泡茶
掌管	面黃肌瘦	這早	就裏	清水流	免得	十字街口	算/算還	裡
閣主	齋米	騎翻	腰包肚包	父子客店	空頭度牒	矮矮2	一言半句3	鬍鬚
東廁	(大)去処	兇猛	碎銀2	鐵匠舖	價值	緣故	門面	提轄
法帖	十方常住	打開	鳥大漢子	餓々地	師兄	停藏	肉案	相貌堂々
潑皮	綽號2	心慌	杌刺子	禪杖	薄面	大哥	小廁(厮)	高姓大名
間雜人等	土竈	韁繩	泥和顏色	戒刀	托大	V+過	臊子	連忙2
糞窖	湯氣騰々	扯断	張看	水磨	禪床子	僻淨	肥的	茶錢
小耍	破漆	燈草	調轉	家生	禪和子	榜文	使頭	圍住
妙計	嘲歌	看一看	顛墮	價銀	裸袖	張掛	說得是	十来條/碗
嘻々	一身	江湖上2	直娘的禿驢	討價2	團魚	恩人3	肉案門	屁眼
隣舍街坊	吃膽	一路	起裡	酒望子	鴉青	買賣2	腳底下	團座
歹心2	邊箱	駭怕	脚絆	卓子	鷄頸攪攪	慢々地	頂門心	老兒
饒恕	田庄	寨主	重々疊々	房屋	往常	簾子	尖刀	串拍板
那鳥	排告出	交椅	鳥人	酒旗兒	贈与	新討	一道烟走2	萬福
拖上來	家私	今番	綁縛	市稍盡頭5	籤子	嫖娘	火家	情由
兀	消乏	定禮	年甲	草蓆兒	擔桶	牌兒	過路	搬移
蠢物	脚/角門	翻悔	活仏	莊家	作耍	莽子	勸解5	流落
火半	力怯	背負	莊上	篩米	火工道人	郎君子弟	揪	大官人
衣飯碗	架隔遮欄	衣包	好意	早來	老郎	壯俊	胸脯	奴家
提轄官	脚步響	滾將下	耳房2	賣沒	直廳	一五一十	踏住	大娘子
喏々	暗算的人	丟落	熱鬧	多的	轎夫	粗鹵漢子	強騙	生受
這里	圈子	一滾	閑/閑管	拽拳使脚	不是頭	晌午	鼻子上	店主人
半酣	瓮兒	骨碌骨碌	時常	倦困	匾担	管待3	半邊	間壁閑子
哇々	猛惡林子	脚邊	親事	一膀子	褪膊	喚做	油醬店	磔兒
叩齒	探頭探腦	滾到	入贅	刮々々々	露出	五花度牒	鹹的	盡兒
角邊	剪徑	買路錢	安放	擱在	頭重脚輕	雜費	酸的	面皮
倒繳	晦氣	留下	赤條々地	門縫裏	擺々揺々	首坐	辣的	倍/陪/賠話4
當晚	等一等2	撚	火把	遠々地	催命判官	上刹	一拳	着落
匾々の伏	協助	團々	明晃々	一推	拿2	僧寮	水陸道場	身價
還席	久戀3	滾下	燈籠	咯々	裸形赤體	大利	鉸兒	綽名
大碗	撥開	一帶2	撮尖	唵唵	竹批	禪椅	鏡兒	原來4
蘆席	刮々雜々	敗落	下馬盃	下首	擱/顧入	肩下	挺在	腌臢
渾鐵	三岔路口	牌額	怕羞	嘴邊	亮榻	兩班	慢々	潑才
颯颯	京樣	倒塌	那里	拳頭	報知3	V+將來	短棒	包裹
喝	拆/拆開	崩摧	卧房	V+起	禿驢	表弟	州衙	放在

⑨椿説夢張月			⑧新編水滸画伝					
陪/陪話	摩損	籬笆	小二哥	點視廳	耳朵索兒	實價	放慢	抓角兒
不題	端的	接風	生得	往來的人	潦漿泡	茶店	那日	阜靴
備細	演義小説	熟牛肉	潑賊	單身房	回話	辱抹	眼見的	教師
究竟	做2	相擾	花鎗	點視	想思病2	翻來復去	完聚	刑/荆婦
強惡	憑空	飛也似	前街後巷	一般的	過活	已牌時分	拿下	還香願
俚言	傳話	搬開	一地里	土牢	不揀怎的	承局	耳房裏	合口
大勢	口氣	絮被	夾巷	殺威棒	胡思亂想	多口的	冤屈	奸誰不及的
店官人	撲地	掇將	團團	寄下	休書	一盞茶時	好生	吹筒
昏倒	掉	過來	消耗	僻淨處	寫文書的人	節堂	監押	重氣
昏絕	有一日3	小鬼	大軍草料場	老漢	手摸	這廝	客帳司	粘竿
好意	打扮	廟主	常例錢/錢鈔	困倦	屈事	使豆腐	牌單	胡梯
桿棒	噴飯	袖子	取覓	索子	好頭腦	端公	是該死的	調戲
問話/休憩	只管	下酒	一挂	緊々の縛	日後	閑兒	龕窗的軍漢	螟蛉子
報知	只見	必々剥々地	老軍	死数	半晌3	萬字頭巾	喝退	花花太歲
正廳	口順	爆響	老都管	腦袋上	甦醒	背子	次後	多管
駭然	渾名	縫裏	病症	劈將	扶攙	下面	趕去	和哄
处理	裡面	靠住	賊配軍	做神做鬼	鬼胎	淨穢	口詞	厮打
案下	荊婦	憐見	大刺々の	熱腸	乾淨	底脚	回文	小衙內
喊声	管待	把除	賊骨頭	小小	僻淨處	少刻	枷杻	撮鳥
萬夫不當	常言	脍炙的	差撥哥々	打餅	白喫	對頭	監下	阿嫂
刀尖	数詞+個	撒倒	管管哥々	那廝	囑付	僻靜去處	家裏3	間漢
一烟走	只顧	翻在	端的好男子	發作	甦笠	解活的	買上告下	沒撩没乱
奮然	晦瞭	扯開	此表人物	項上枷	土坑	作的	當案孔目	小閑(閑)
霎時4	浩処/處	兩箇更次	感冒	間走	一掉	兜答	週全	納悶
認得	一五一十	透出	痊可	酒生兒	一發	大松林猛惡去處	這般	躲在
目標	緣由	庄家/小庄家	看守的	過賣	發下	揭取	拿得	水性
廟祝	著	焰々地	帖文	好菜蔬	刺配	包辦	長枷	甜話兒
V+著/着	緣故	管管使	省氣力的勾當	汁水	小哥	刺字	文筆匠	隔壁巷內
猛然	起程	輪流	看管2	順當	迎迓	水火棍棒	牢城	且說
晦然	居多	厮們	紛々揚々	丈母	將出来	棒瘡	當廳	門首
小厮	叫苦2		捲下	兩口兒	解去	拳發	團頭	布簾
士兵	連忙		黃土牆	漿洗	勾當	上下	護身枷	腌臢的氣
壮佼	探索		倉廩	縫補	擡來	咕咕	防送	兄長
打倒2	焦燥		四下	問話/休憩	配軍2	喃々咄々の	押送	誰的氣
情由	外面		草廳	菜蔬下飯	倚草附木	埋冤	維持	昏絕
害怕	N+裡		一堆一堆	凳几	對手	棍棒	年災月厄	看了家
扛擔	曉得		数目	菓品	小可	碎銀兩/子	屈官司	閑在
狗黨	職事僧		火盆	講了禮	賺兒	百沸滾湯	權且	棲櫕
轎夫	揠		鍋子	副勸盃	撞	脚盆	完聚	乞閑
暗號	慌忙		拿去	不鷹尬	管管	傾在	渾家	解腕尖刀
眼罩	臥房		泥水匠	大姐	差撥	伏侍	這件事	胡做
幕直	一带		鎗竿	聽一聽	看觀/顧	面湯	大漢子	耐
罩燈	蹲踞		庇佑	轉背	萬幸	草鞋	草標兒	草酌

⑪夢想兵衛胡蝶物語			⑩三七全伝南柯夢			⑨椿説夢張月			
卑怯	港口	熱鬧場	劬辛	花街	脚色	各位	分娩	山寨	配軍
讒諂	款待	帷子	庖俚	杜騙	播乱	小雲時	機器	住居	拳止
炎	跟々踏々	眼鏡	驛路	千辛万苦	只管	妙計	巷口	脚門	他們
朋輩	活業	樺/稚児	唧言	痴情	做	直々	轟然	伶俐事	原來
説示	煙管	顚門	套房	款待	究竟	勇婦	脚色	親胞兄弟2	一陣走
三寸不乱2	土庫	爹々	財布	綽名	焦燥	惡障	乱打	家廟	江湖上
話說	走馬燈	行燈	遞与	V+了	V+著/着	工致	口碑2	旅路	播乱
貯禄	胸前	戸棚	好意	渾名	揔	朋輩4	(村)稍盡处	跟2	執念2
播槌	殃危	惑溺	從來	管待	只顧	訓問	照射	調度	剪徑
N+裡	謠曲	紙屑	目今	臥房	活業	忒2	低語	小說	歹心
矮姓	緣故	埋伏	雜費	恩人	慌忙	奇緣	突破2	些許2	奇談
幫間	綽名	梯子	探問	大轎	昏絕	本事	耳房	針盤	頹破
跛子	茶店	量筒	洗濯	啞子	緣故	目的	看破	舵工	快船
門口	膠酒	慌忙	阿呀	亮隔	準備	行囊	催生湯	龜忽3	款/款待
路頭	高脚杯	蔽衣	柔術	忌嫌2	痞	簪端	藥店	官帽	遮莫
恣憐	茶臺	乱走	劍法	壯佼	地炕	地炕	杜騙3	花繡	團坐
里俗	老實	色情	家裏	佞言	撲地	背影	殘毒	驛路4	日子4
一言半句	説論	路費	跟	裡	一五一十	察事	面色	乱走2	準備
驛路	湿氣	吝氣	酬愿	埋伏	常言	夥計2	看管	治庖	血刀
只顧	強人	勸解	戸棚2	們	胡慮	推開	調煉	V+了	目今
原來	酒量	傍室	些許	身價	緣由	地坑	叱退	阿公	勸解
調度	V+了	繚致	朴刀	苦肉	叫苦	行燈3	椿事2	一响	惑溺3
裡2	路銀	算盤	胸前	苦計	浩処	惡棍	他事	禳除	孤忠
日子	招待	外面	殃危	惑溺	午飯	籬笆	主管	考据	後廳
癡情	常言	賠話	扶起	較計	勸解	察事卒	糞汁	滾落	封皮
杜騙	桿棒	蹲踞	弄賣	轎夫	清々	疑心暗鬼	佳餚	女流	苦計2
脚色	小厮	住居	悔歎	惡棍	紀念	癡情4	領諾	惡民	説論2
批評2	數詞+把	胡慮	話說	打倒	路頭3	解手刀	追打	唾子	爹々3
假托	浩処	牙婆	戲曲2	突破	日子	説示	打傷	刮刺々	轉輾2
阿唯々々	礼金	放屁	親胞兄弟	撞見	洞然	愚父	恩人	壓鎮	板子
齊々整々	好意	疳積	他事	光棍	滅却	胡慮	哀歎	滾落滾落	千辛萬苦
柳巷	夥計	旅路	説示	病發	拳止	槩畧2	撞見	扶起2	賞嘆
準備	甚麼	工夫	假托	店前	情由	背門口2	扁額	港口3	却説
酒店	穿出	花街	朋輩	相思病	外面	久戀	村正	鑒定2	百折千磨
性質	苦笑2	遞与		茶店	路銀	住職	門扉	毒計	路銀
苦2	較計	一向		遮莫	打扮	驀地	乱箭	説知	跟々踏々
圍堰	奶々	財布		概畧/略	數詞+個	浮浪人2	打掉	出沒不測	紀/記念
冷汗	痘癍	鉄砲		路費	口順	從來	軍民	半晌	行童
主管	有一日	百折千磨		隱匿/愿	急促	拿	指向	隱愿2	朴刀
	面色	關隙		龜忽	酒店3		壯丁	姦淫	埋伏4
	庖漏	妙計		驛稍盡处	刀尖		樓上	一齊	睜
	紙牌	只管		訛声	驀直		稚/樺児2	陸續2	三魂六魄
	背門口	小說		小曲子	奮然		濠門	牌金	胸前4

⑫青砥藤網摸稜案			
嫖客	房錢	婢女	没影事
樓上	買賣	滾落	他事
賤妓	辛苦錢	慌忙	有一日
常言	碎銀	鄉/村稍尽处	假托
久戀	纏致	問慰	數詞+把
花街	胡慮	家廟	里老
揸	本事	癡情	口碑
殃危	半晌	緣由	編纂
家裏	妓院	一五一十	小廝
旅路	枉費	焦燥	討價
霎時	容赦	斷離	考證
熱腸	微祿	惡棍	活業
曉得	倭子	害怕	餘澤
話說	光棍	茶店	數詞+個
路費	行囊	拳法	V+著
榜示	打扮	賭博	港口
沸々	究竟	剃度	說示
刀尖	驀直	龜忽	原來
團坐	苦	病疴	莊客
拐兒/拐兒奴	傳奇	駭然	款待
封皮	草賊	閨女	樓廊
驛/里尽处	戲曲	綽號	苦笑
判官	批評	老實/実	忌嫌
起程	蠅頭俗體	遞与	壮佼
胸前	破落戸	病發	盤纏
報知	驛路	撞見	外面
罪籍	主管	較計	浮浪人
要緊	執念	勸解	裡
轉輾	却說	日子	臥房
鑑定	V+了	三寸不乱	參々
桿棒	雜費	背門	準備
等一等	搖錢樹	賠話	只管
失敬	熱鬧	面色	奇緣
陸續	裡面	埋伏	恁憐
朋輩	行燈	怕害	忙慌
牽強附会	住家	好意	案下某生再/更說
暗号	淨手	吾們	調度
巡歴使	詭欺	出家人	令愛
廳前	紀念	緣故	椿事
惺惺	小霎時	偷兒	撲地
目今	熱鬧場	住居	貯祿
	酒店	路頭	一言半句
	虔婆	退糧人	浩処